

モイモイのモイ

(一歩一歩のたった一歩)



カンボジアの子供たちと クライミングをする (2)

孤児たちは、NGOのしなごが支援する農村から依頼されて、C孤児院に預けられていた。両親は、HIVやその他の病気で亡くなっていたり、存命していても親権を放棄、または、親権能力が破綻していた。なかには、包丁を振り上げる錯乱した親に、毎夜追いかけられていた子もいた。

似たような孤児院が、カンボ

ジアには現在30000くらいあると聞く。孤児たちにクライミングを教える場合、免責規定への同意が必要な親権者は、親代わりとなる担当者一人で済む。例えば子供の数だけ、ぞろぞろ保護者が岩場へ同行することを想像すると、それはとても合理的だった。しかし、後に分かってくるのだが、孤児には、深い虚空のような闇がすぐ隣にパツクリと空いていた。

2009年12月、人工壁の施工計画を詰める段階で、C孤児

目指せ、 アンコールクライマー誕生!!



2010年1月21日、僕らの人工壁、アンコール・クライミング・ウォールの施工 2 日目。施工技術を学ぶC孤児院のソチエン(仮名、中央右寄り)。



アンコール・クライマー誕生の兆し。本文と関係ないが、本稿を書き出す3日前に開催したクライミングコンペ、Angkor Cupにて。出来たばかりのボルダーでウォーミングアップする子供たち。このウォールは、恐らくカンボジア人だけで作った初めてのものだ。

院から研修生を受け入れることにした。英語の堪能なソチエン(仮名、21才)と、英語はダメだが身体能力の高いラッタナ(仮名、20才)。彼らに施工チームのもとで施工技術を学んでもらい、その後のメンテナンスに役立って欲しいと考えたのだ。しかし、人工壁が竣工し、信州・佐久のガイド君が彼らにクライミングを教え始めた頃、事件が起きた。

ナイフを持って狂ったように暴れるラッタナを、ソチエンが角材で減多打ちにしたのだ。ラッタナは頭部を縫うケガで、2人は謹慎処分となった。その後、ラッタナは、C孤児院から追放され、酒乱の母親がいるだけの故郷に帰った。しかし、ある晩、村長に暴力をふるい逃走した。また、人工壁の工事に使った資材小屋のトタン壁がある日の未明、刃物でずたずたに切られた。やったのは

ソチエンだった。トタンの裂け目に彼の心の闇が垣間見えるような気がして僕は戦慄した。

人工壁が竣工すると孤児たちは毎週末、クライミングを楽しみにやっていた。その中から、利発で機敏なソチエット(仮名、14才)と、熊のような風貌のボン(仮名、19才)がインスタラクターのトレーニングを希望した。そして、雨季に入るとアプサラダンスをこなすソチエットの姉、サピア(仮名、16才)も加わった。しかし雨季明けの近い10月2週を最後に3人も来なくなった。

やがて、「勉学に励む必要あり」とC孤児院の担当者から、奇妙にあつさりとしたコメントが代理人を介して伝わってきた。週末のスターリングは続いてしたが、3人はそれにさえ参加することはなくなった。さらに、クライミングに抜群の資質を見せていた11才の双子姉妹、トゥリー(仮名)とモム(仮名)も消えた。2人を捨てた親がある日突然現れ、引き取っていったのだ。子供が、稼げる年齢に達したからだと聞き、僕は耳を疑った。

(続く)

*人身売買の情報に利用される危険があるため、また子供たちの将来を考慮し、施設名も施設の子供たちの名前もすべて仮名にしています。